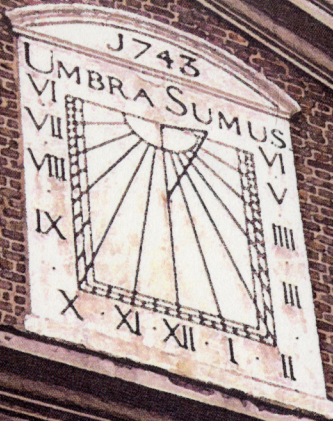


人はみな歌い、踊る

Vol.16

横井雅子

ロンドンの移民の街から



BRICK LANE JAMME MASJID

جامع مسجد بريك لين
بریک لین میں جامع مسجد

もとはユクノー派の教会だったブリックレーンのモスク

横井雅子

音楽研究家、国立音楽大学准教授。

音楽そのものを調べるだけでなく、

音楽と人びとがどう関わって生きているのかに興味があります。

その向き合い方の違いに驚かされたり、感じ入ったり。



品揃えの充実している
サウソールのインド楽器店

同じ英語圏でも、イギリスはアメリカほどには多民族の国とは思われていない。イギリスに限らずヨーロッパの多くの国でそうだが、白人社会を想像していくと、一見してそのイメージが間違っていたことに気付かされる。一九八九年の体制転換や近年のEU拡大以降、どの国や地域でも多種多様な人びとと出会う。イギリスはそれが少し早く、第二次大戦後に始まった。旧イギリス領植民地からの移民の多くは二十世紀後半に流入してきた。

機会があつて、三月にロンドンの三つの移民コミュニティ(正確には二つ)のだが、これは後述しよう)を訪れることができた。

イギリスの移民でもっとも目立ち、数も多いのは南アジア系つまりインド、パキスタン、バングラデシュの人びとで、二百万人を超える。イギリスの総人口が約六千万人なので、人口の三パーセント以上が南アジア系住民で占められており、その多くはロンドンに集中している。今回訪れたのは南西部に位置するサウソールと東部のブリック・レーンだ。

サウソールの駅でまず移民の街であることと実感させられる。駅名が英語とパンジャブ語を書き表すグルムキー文字で並列して表記してあるのだ。ここサウソールの人口の半分以上はインド、パキスタン出身者なのだがグルムキー文字が使われていることからインド北部とパキスタンで使われるパンジャブ語が優勢であることがわかる。街を歩いてみるとターバンを巻いた男性が多い。シク教徒だ。この地域に三つあるシク教寺院のうちの一つは、インド国外でもっとも規模が大きいものという。風景もさながら小インド。食材から服、本などの基本的なものが揃うのはもちろん、楽器店もかなり規模が大きい。手広く南アジアの楽器を扱っている店はインドのデリーにある楽器店の支店だ。店主は北インドやパキスタンの音楽家たちとも顔なじみで、店主がこやかにカッワーリの

巨人、スラットと納まっている写真も飾られている。店内に置かれているパンフレットから、幅広い南アジアの音楽や芸能がロンドンで享受されている様子も垣間見えてくる。訪問の最後に、まだ建って五年というその巨大なシク教寺院の礼拝を見学させていた。ハルモニウムとタブラの音が響き渡る礼拝堂では異教徒である私を咎めるように見る人は誰もいない。カーストを否定するシク教徒は寛容だとも言われ、礼拝堂を出ると他の信者と同じように砂糖菓子をふるまってくれた。

一方、ブリック・レーンの移民の歴史は古い。ロンドンのいわゆるイーストエンドであるこの地域には十七世紀にフランスの宗教迫害から逃れてきたユグノー教徒が住み着き、その後アイルランド人、ユダヤ人と続き、二十世紀になってバングラデシュからの人びとがやってきて今日にいたっている。日曜日には市が立つことでよく知られるが、この習慣はユダヤ人が作ったのだそう。そんな込み入った歴史もあつてか、サウソールに比べるとたしかにさまざまな風貌、服装の人に行き会ふ。このブリック・レーンの入り口にはまだ新しく立派なイースト・ロンドン・モスクがそびえるが、通りを歩いていくと、目立たず、まったくモスクらしくない建物が目に入った。十八世紀にはユグノー教徒の教会で、後にユダヤ教の礼拝堂となり、一九七六年にイスラーム教のモスクとして使われるようになった、いかにもこの街らしい「祈りの家」だ。また、そこからほど近いところにはコミュニティのさまざまな住民に利用される複合文化施設のアイディア・ストアもあり、音楽ソフトも充実しているその様子を見るとさすがに「移民大国」だと納得させられる。

最後に訪問したのは中心部よりやや西寄りのハマースミス。南アジアの人ほど外見で目立たないが、最近多い移民はポーランド人だ。EU拡大後、イギリスがポーランド労働

者を制限を設けずに受け入れたことに起因しているらしいが、その数はなんと七五万人。カリブからの移民を上回り、今やパキスタン人に匹敵し、しかもまだ増加中なのだそう。ポーランド人が多いときかされていたハマースミスは、実はサウソールやブリック・レーンほど確固とした移民の街ではなかった。しかし、ハマースミスと同じ地下鉄の沿線に住む人が多く、それもあつてここにはポーランド社会・文化センターがある。第二次大戦中に亡命してきた人びとのために作られ、今も人びとが情報を求めに、本を借り、知人に会いにやってくる。いずれにしても、ポーランド移民には今後も要注目といったところだ。

性格の異なる三つの街しかし共通していたのはその中心に移民たちを精神的に支える文化を享受できる場があることで、だからこそ人びとは異国の地に寄り添って根を下ろして生きていけるのだろう。彼らを受け入れてきたイギリスの懐の深さを感じさせる場所でもあつた。



サウソールのシク教寺院 Gurdwara Sri Guru Singh Sabha



ポーランド社会・文化センターにはイベントや新刊本のポスターが